

題 目 マーフィーの法則を分析する

発表者

田中 任

マーフィーの法則は、われわれの日常生活における経験から生まれたいろいろの発見や知恵をおもしろ可笑しく纏めたものであるが、ここで問題にするのは‘悪いことは起こりやすい’とか、‘うまくいかないときは、なにをやってもうまくいかない’というものである。世の中はなかなか自分の思い通りにはならないし、意地の悪いことも多く起こるので、この法則はよく知られている。そして、マーフィーの法則があるから、不幸が起こるのだと冗談をいう人もいる位である。科学者も、マーフィーの法則は馬鹿げた‘現代の神話’と見なして正面きって問題にすることがない。しかし、私などこのマーフィーの法則に忠実なものとしては、もう少しこの法則について分析があってもよいと考える。たまたまアメリカの科学ジャーナリストのロバート・マチュウス氏がこの法則についての科学的論文を発表したので、これを参考にしながら、この悪名高きマーフィーの法則にも、科学的根拠があるのだということを報告したい。

昔から、物事は本来悪い方に行きやすく、不幸をもたらしやすいといわれてきたが、他の文化と同様にこのマーフィーの法則の発生過程もはっきりしない。しかし、マーフィーという人はたしかに実在した。とくに Edward A. Murphy は 1918 年にパナマに生まれ、1940 年にウエストポイントにあるアメリカ合衆国軍事アカデミーを卒業している。その後、オハイオ州のライト・パターソン空軍基地の士官となった。1940 年の後半に行われた空軍プロジェクト MX981（人間に及ぼす減速の影響について）に参加した。これは人間をロケット・エンジンで推進して、レール上を点火後 5 秒で時速 1017km にまで加速し、その後 1.4 秒間で減速、急停止すると云った過酷なものである。そして、その時の被験者の循環器系、呼吸系、脳機能などを検査する。たまたま、この実験で記録をモニターする器具のケーブルが反対方向に結ばれて正しい結果が得られないということが起こった。マーフィ大尉はこの経験から、人は過ちを起こす可能性があるときは、過ちは起こるものだということを知った。これがマーフィの法則の起源である。その後、記者会見においてプロジェクトのメンバーの一人が、このマーフィー大尉が得た経験則を披露した。‘If it can happen, it will happen’. というものである。「二つ以上の方法があってそのうち一つが災害につながる場合、人は悪い方を選んでしまう」。人生は思うに任せない。このほろ苦い真実が人の心をつかみ、数多くのマーフィの法則が生まれた。‘If something can go wrong, it will’. ということになったのである。

本研究会では、1.地図で地名を探すときの法則、2.列に並ぶときの法則、3.片一方の靴下がたまる法則、4.雨傘を持って外出したときの法則、5.トーストを落としたときの法則などについて、考察を加える。